砂漠の足跡

古宮　九時

転移門によって出た先は、どこまでも続く砂漠だ。
オスカーはぐるりと辺りを見回し、頭上に浮かぶ魔女に言う。
「見事に砂漠だな。何もない」
「だからくじ引きで行く先を決めるのやめなさい、って言ったじゃないですか」
黒髪黒目の絶世の美女。若き王の守護者である魔女は、呆れ顔で釘をさす。
「気が済んだなら帰りますよ。あんまり長く執務室を空けてるわけにもいきませんから」
「待て。気分転換に来たのに早すぎるだろ。もうちょっと見て回りたい」
「砂しかないのに……」
彼の休憩につきあって転移門を開いたティナーシャは、音もなくオスカーの隣に降りた。白砂の上に小さな足が立つ、と同時に周囲の空気が涼しくなる。
「倒れられても困りますから気温は調整しますよ。帰りたくなったら言ってください」
「ずっと砂ばかりなの面白いな。これ、どれだけ下まで砂なんだ？」
「さあ……掘ったことないので分かりません」
「なるほど。掘るか」
「嫌です。何考えてるんですか、貴方」
「お前の塔を上下逆にして地下に埋めこんでみるってのはどうだ？　深さが分かるだろ」
「完全に迷宮……風も日も通らない……」
「そういえば、ここは昔から砂漠なのか？」
「……私が生まれた時はそうでしたね。でも以前は違ったみたいですよ。暗黒時代以前の空白期には、ここに小さな国があったそうです」
「なんで砂漠になったのか気になるな」
言いながら、オスカーはどんどん白砂の上を歩いて行ってしまう。ティナーシャは溜息をついてその後を追った。砂漠に二組の足跡が伸びていく。

※

「――あの砂漠って、昔は国があったんですか!?」
雫は声を上げてしまってからあわてて口を押えた。
周囲を見回すが、夕食時の街の食堂はざわついていて誰も気に留めない。エリクはスープ匙を手に取りながら頷く。
「暗黒時代の前、神話時代の後ろには空白期って時代があるんだけどね。その時には国があったそうだよ。『エプチャ』って名前の国で、交易で栄えてた。でも精霊術士の集落と諍いになって滅びてしまったんだよ。風が常に砂を運んでくるようになって、城も街もゆっくりと砂の中に沈んでしまった。精霊術士は自然物を操るのに長けているからね、そういうこともできたんだろう」
「すごい話ですね……。無茶苦茶だけどロマンがあるというか。ファンタジーっぽい……」
「もっとも、この事実が明らかになったのは滅亡から千年以上が経ってからだ。約三百年前に当時のファルサス国王が気晴らしで遺跡を発掘し始めてね、建物を掘り起こして詳細が明らかになった」
「???」
雫は言われて大陸地図を思い出す。ファルサスとは当の砂漠よりずっと西で、雫が向かっている目的地だ。彼女は何通りかの可能性を考えて、一番もっともらしいことを口にした。
「当時はこの辺りがファルサス領だったんですか？」
「いや全然。ファルサスは今と大差ない場所だったよ」
「???」
雫は意味の分からなさに首をひねる。それを気の毒に思ったのかエリクが補足した。
「ファルサス王族って代々落ち着きがない人が多いんだよ。変な揉め事に首を突っこむ人が多いというか」
「あー、暴れん坊将軍ですね」
「語感的には近いな」
雫は自国の名だたる偉人の面白エピソードを思い出し納得する。異世界の旅はこうしてファルサスへと近づいていった。